

# 気づき、考え、実行する さし人つうしん

唐津市立佐志小学校  
学校だよりNO.27  
令和4年3月4日  
文責：校長 松野克己

## 6年生演劇鑑賞

3月1日(火)に6年生が演劇鑑賞をしました。この企画は元々、2月1日に計画していましたが、今年に入



ってからの急激なコロナ感染拡大でやむなく中止をする連絡をしていました。しかし、劇団の方のご厚意で、1ヶ月後の3月1日を延期日にしておき、その時も感染拡大傾向が続けば中止するというにしていました。現在、感染は高止まりですが、拡大傾向にはない状況でしたので、市教委の意見も聞きながら実施することとしました。

左の写真のように大がかりな舞台装置で10トントラック満杯の機材が体育館に搬入されました。児童は間隔を空け、常時、換気をしていましたから、ストーブは設置していたものの底冷えはしました。が、そんな中でも、6年生の児童は食い入るように劇に見入っていました。

今回、来ていただいた劇団は東京東中野に本拠地を構える「東京演劇集団『風』」の16名の方です。もちろん、この演劇を職業とされているプロの皆さんです。自分たちの劇場だけでなく、全国巡回公演も行っており、これもご厚意で昨年度鑑賞できなかった6年生のために、今年度も東京から来ていただきました。当然のことながら莫大な費用がかかりますが、これは文化庁の「子供のための文化芸術鑑賞」という事業の一環で、本校がそれに当選していたため、学校からの負担は全くありませんでした。本当にありがたいことであり、公演前にも児童には感謝の気持ちをもって観劇するように伝えました。

みなさんご存じの「ヘレンケラー」が今回の演目で、幼少期のヘレンケラーと家庭教師のサリバン先生との心のつながりがテーマとなっていました。苦悩や葛藤の末にヘレンは次第にサリバン先生の言うことを聞くようになっていき、両親はそれを喜びますが、サリバン先生は「ただ服従しているだけで、ヘレンの心は解放されていない」という思いから、さらに心のつながりを求めていきます。それだけに、指文字を通して互いの心が通い合ったクライマックスのシーンは、見ていた子供たちの気持ちも大きく揺さぶったことでしょう。演劇のもつ訴える力や心を動かす力に触れることができ、卒業を目の前に控えた6年生にとってのいいプレゼントになったのではないかと思います。



今回の演劇で画期的だったのは「バリアフリー演劇」であったということです。視覚や聴覚に障がいがある人にも演劇を楽しんでもらいたいという願いから、大きく3つの工夫が取り入れられていました。まずは音声ガイド。目が不自由な人に台詞だけでは伝わらないステージの状況などを、劇団の方がお芝居の流れに沿って説明されました。2つ目は字幕。左の写真の右上に見られるような字幕がステージ上に映し出されました。聴覚に障がいのある人も、これなら楽しめますね。ただ、演じる役者さんは台詞を間違ったりごまかしたりできませんから、これはプレッシャーになることでしょう。





もう一つは手話通訳。台詞を手話で伝えてくれます。手話通訳というと、直立してのイメージがありますが、そうではなく、ステージの中央近くで役者さんたちと同様に動きながら、時にはお芝居に絡んで、役者の一人のような感じでした。後から代表の方にこのことを尋ねると、手話通訳がステージの端にいと、そちらにばかり目がいってしまうから、そうならないように思い切って今のような立ち位置にしたとのことでした。実際にお芝居を観ていてもそんなに違和感はありませんでした。このように健常者、障がい者というバリアを取り払って演劇を楽しんでもらいたいという取組は素晴らしいと思いました。

劇の終了後は、代表児童からのお礼の言葉と花束贈呈を行いました。普通の演劇鑑賞はこれで終わりですが、ここから劇団の方の粋な計らいで、ステージの上や舞台裏も見せてもらいました。例えば、写真に写っているお皿はヘレンが乱暴に扱うシーンがあるため、割れないようにラップのようなカバーがされていました。またグラスも倒れないように、テーブルに置いたとき、テープで固定するように工夫されていました。演劇の世界の裏側まで見せていただくことで、子供たちは演劇を身近に感じる事ができたかもしれません。今、こうやって思い出しながら、改めて劇団「風」の皆さんには感謝の思っています



## 子供たちからもらう優しさ・・・

地域の方からたいへん嬉しいお電話をいただきました。それは「佐志小の児童は横断歩道を渡るときや渡った後に、きちんと礼をしてくれる子供が多いです。嬉しいです。」といった内容でした。名前までは分かりませんが、登下校の際に信号機のない横断歩道を通る児童のことでしょう。こうやって、子供達がお礼の気持ちを伝えることで、運転者は優しい気持ちになれますね。ただ、本来は歩行者優先ですから車が止まるのがルールだということを改めて運転者は自分に言い聞かせたいものです。



## ありがとうの花束

今、児童玄関前には「ありがとうの花束」という掲示物が置かれています。これはハートフル委員会の企画で、お世話になった6年生に対して、一人一人の在校生が感謝の気持ちをカードに記したものです。低学年では「掃除を手伝ってくれてありがとう」「いっしょに遊んでくれてありがとう」といった内容が、高学年では、運動会や委員会活動で学校全体を引っ張ってくれたことへの感謝が多く見られました。また、どの学年にも「中学校でも頑張っ！」といった励ましの言葉もありました。これらは、掲示するだけでなく、お昼の放送でも紹介してくれています。

集会という形がとれなかった6年生を送る会は、各学年ごとに呼びかけや寸劇のビデオ撮影をし、先月の25日に放映をしました。それぞれの学年で工夫を凝らした内容になっており、私も見ていて微笑ましく感じました。今年度の卒業式も在校生全員は参加できず、5年生のみが参加します。そのこともあって、在校生は別のやり方で6年生との別れを前に感謝を伝える取組をしています。6年生の卒業まであと2週間を切りました。卒業生としての名残を惜しみながら、悔いのないように卒業の日を迎えてくれることを願っています。

